

フークトーブ通信 66

いわきに遺る炭鉱夫の像と軍需生産美術推進隊

高橋 翔 (福島市)

終戦八十年に際し、本稿では戦争と美術の関わりの一侧面として、いわき市内に遺る二体の炭鉱夫の像を紹介したい。

これらの像は、一九四四（昭和十九）年十月に「軍需生産美術推進隊」の彫刻家たちによつて制作された。一体は旧古河好間炭礦の会館前に建てられた後、現在はいわき市石炭・化石館の敷地内に移設されている。

（現在は《産業戦士の像》の名称で知られている）である。もう一

体は《総蹶起》（同じく《坑夫の像》）で、旧常磐炭礦湯本礦の自治会館前に建てられた後、現在はいわき市石炭・化石館の敷地内に移設されている。



図1 旧古河好間炭礦
会館跡地の《進發》
(2025年8月筆者撮影)

《総蹶起》は、全高約三メートルの高さで、こちらも二体の男性像からなる【図2】。彼らは、向かつて右側が右肩

像である。《進發》は全高約六メートルに達する巨大な像で、大小二体の男性像が正面を見据えている【図1】。大型の男性は炭鉱の突撃隊員で右手にZ旗を持ち、他方は予科練生で左肩にスコップを担いでいる。

《総蹶起》は、全高約三メートルの高さで、こちらも二体の男性像からなる【図2】。

各像とも、セメント（コンクリート）製の台座に載るセメント塑像である。《進發》は全高約六メートルに達する巨大な像で、大小二体の男性像が正面を見据えている【図1】。大型の男性は炭鉱の突撃隊員で右手にZ旗を持ち、他方は予科練生で左肩にスコップを担いでいる。

《総蹶起》は、全高約三メートルの高さで、こちらも二体の男性像からなる【図2】。

これら炭鉱夫の像は、当時のいわきの位置付けと共に、戦時下の彫刻家たちの活動を示す資料といえよう。他方、今日では経年劣化も進行しているため、今後も調査を進めていきたい。



図2 いわき市石炭・化石館敷地内の《総蹶起》
(2025年8月筆者撮影)

にピック（穿孔機）を担ぐ先山鉱員で、左側が左手にスコップを持ち、右手を高く掲げる

後山鉱員である。同じ二体の男性像からなる一方で、人物の大小といつた差異からは造形の多様さが看取されよう。

軍需生産美術推進隊は、一九四四年四月八日に軍需省の外郭団体として結成された。隊員たちは絵画班と彫塑班に分かれ、同省の推薦する優良工場等において、増産意欲を高める作品の制作による挺身協力を行つていて。

彫塑班は、西から福岡県、新潟県、福島県、北海道で計十一体の炭鉱夫等の像を制作している。本県では《進發》を中村直人、圓鍔勝三、長沼孝三、木下繁、峰孝の五名が、《総蹶起》を中川為延、林是、野々村一男、中野四郎、清水多嘉示、古河忠雄の六名の彫刻家が担当した。

さて、中川たちの班は十月六日から常磐炭礦で《総蹶起》を制作して十八日に除幕、他方中村たちの班は古河好間炭礦で同一日から《進發》を制作し、二十二日の除幕に至つている。短い制作期間は、複数名による共同制作、そしてセメントの速乾性を活かした現地制作から実現したと思われる。

これら炭鉱夫の像は、当時のいわきの位置付けと共に、戦時下の彫刻家たちの活動を示す資料といえよう。他方、今日では経年劣化も進行しているため、今後も調査を進めていきたい。